

石川

ISHIKAWA PREFECTURAL
MUSEUM OF HISTORY

れきはく

No. 134
2021.4.16

令和3年度春季特別展

小原古邨

—海をこえた花鳥の世界—

2021 4/24(土) 6/27(日)

小原古邨「竹に雀」

中外産業株式会社 原安三郎コレクション

(後期展示)

令和3年度
春季特別展

小原古

— 海をこえた花鳥の世界

4/24(土) ▶ 6/27(日) 9:00~17:00
(展示室への入室は16:30まで)

前期 4/24(土) ▶ 5/23(日) 後期 5/26(水) ▶ 6/27(日)

前期・後期で大幅な展示替えを行います
*展示替えによる休室日 5月24日(月)・25日(火)

石川県立歴史博物館 特別展示室・企画展示室

主催/石川県立歴史博物館・北國新聞社
特別協力/中外産業株式会社 後援/NHK金沢放送局

序章

知られざる実像 小原古邨

序章では、古邨が本格的に花鳥版画の制作にとりかかる以前、「青年画家中に於いて前途有望の聞えある」と称された1903年頃までを、古邨に関わる作品や資料をとおして紹介します。日本画家としての確かな筆致とともに、西洋絵画の影響をうけた若き日の古邨をたどります。

第1章

生きとし生けるものへ 古邨時代

第1章では、原安三郎コレクションから、松木平吉と秋山武右衛門より出版された古邨落款の花鳥版画を紹介します。花や木々、そこに集う生きものたちを見つめた古邨のまなざし。あらゆる気象状況のもとにとらえた生命の輝きを、めぐりゆく季節とともにご堪能ください。

第2章

日々の暮らしのなかへ 祥邨・豊邨時代

第2章では、渡邊庄三郎による祥邨と酒井庄吉・川口商会による豊邨の作品を紹介します。明るく鮮やかな色彩はこれまでの古邨とはまるで別人の趣をみせています。簡潔な描線と平明な色彩による表現、その変化と洗練された装飾性に注目ください。



小原古邨「蓮に雀」
1904-13 (明治37-大正2年)
中外産業株式会社 原安三郎コレクション 蔵

前期
展示



小原祥邨「雪中群鶺」
1927年 (昭和2年)
小原英樹氏 蔵

後期
展示

郵

おはらこそん
金沢出身の絵師・小原古邨(1877-1945)。身近な自然が見せる一瞬の美をとらえた作品は、制作当時から海外で高い人気を誇り、近年国内でも注目を集めています。

明治10年に誕生した古邨は、花鳥画の名手・鈴木華邨に師事しました。アーネスト・フェノロサの指導も受けたとされ、明治後期には版元・松木平吉のもとで花鳥版画を手掛けました。古邨の優れた表現力と、江戸時代から培われてきた彫師・摺師の高度な浮世絵版画の技術。それらが融合することで生み出された作品の繊細さには目を見張るものがあります。

そして大正末期頃からは、祥邨の号を用い、新版画の提唱者・渡邊庄三郎のもとで、作品を発表するようになります。華やかな彩色とモダンな画面構成が印象的な作品は、同時代のアメリカやポーランドなどでも展示され、大きな反響を呼びました。

本展では、浮世絵蒐集家・原安三郎のコレクションにかかる明治期の作品に加え、ご子孫が大切に保管されてきた大正・昭和期の作品もよりすぐり、その画業の全貌を紹介します。あわせて、近代金沢の美術工芸品や師・華邨の作品から古邨のルーツを探るとともに、当時の美術動向を伝える豊富な資料を読みとき、古邨作品の海外受容の裏側に迫ります。



第3章

古邨を育んだ ふるさと

第3章では、幼い古邨が画家という夢を育み、海外に向けた仕事を意識するに至った背景を探るべく、近代石川の美術工芸品や師・鈴木華邨(1860-1919)の作品を取り上げます。あわせて金沢出身のジャーナリスト・桐生悠々(1873-1941)の旧蔵品の中から新たに見出された、古邨の肉筆画「三猿」も公開。故郷・金沢とのつながりや、師弟関係のありようなど、未だ知られざる古邨のルーツに迫ります。



石川県勸業場「花鳥図巻道具」
1876-78(明治9-同11年)
本館蔵

前期
展示

第4章

海をこえて 欧米をめぐる古邨の花鳥風月

第4章では、古邨の花鳥版画が本格的に米国で紹介された1900年からと、祥邨と名を改めて新版画の制作を開始した1926年以降の動きを取り上げます。新版画が米国で紹介される20年以上も前から始まっていた、グローバルな展開をご覧ください。



小原古邨「雪の柳に鳥」
1904-13(明治37-大正2年)
中外産業株式会社 原安三郎コレクション 蔵

前期
展示

終章

時をこえて ふるたず 故きを温ねて新しきを知る

終章では、古邨の作品から、インスピレーションを得て制作されたパティック フィリップの時計を、その源となった古邨の花鳥版画と版元が所蔵していた版画の原画をあわせて紹介します。

観覧料

一般：1000(800)円
大学生・専門学校生：
800(640)円
高校生以下無料

※()内は20名以上の団体料金
65歳以上の方は団体料金

リピーター割引

前期の有料チケット半券を後期にお持ちいただくと団体料金に割引

その他、講演会・セミナー
ワークショップも
多数開催します。
詳細は当館ホームページを
ご確認ください。



資料 紹介



鈴木華邨筆「花鳥図押絵貼屏風」

◆ 学芸員 中村 真菜美

4月24日（土）より、春季特別展「小原古邨—海をこえた花鳥の世界—」が開幕する。金沢出身の絵師・小原古邨（1877-1945）の故郷での初の回顧展であり、未だ謎多き古邨の生涯を紐解く契機となればと思っている。春爛漫の中、古邨の愛らしい花鳥版画の数々を是非ご堪能いただきたい。

さて、本展の担当者として昨年より調査を進める中で、古邨の師・鈴木華邨（1860-1919）もまた石川の近代美術を考える上で極めて重要な存在であることを痛感した。ここでは、県下で新たに発見された鈴木華邨筆「花鳥図押絵貼屏風」を紹介し、華邨と石川との所縁についてまとめておきたい。

鈴木華邨は万延元年に江戸・下谷に呉服商の子として誕生。はじめ菊池斎斎の高弟・中島享斎（1819-96）に就いた。諸画派に学び、とりわけ円山四条派や琳派の影響を思わせる花鳥画に定評がある。華邨は明治8年（1875）にフィラデルフィア万国博覧会事務局の画図係に雇われ、同時期より半官半民の輸出貿易会社・起立工商会社にて、海外向けの美術工芸品の図案家として働いていた。日本美術の近代化・国際化が目指される中、青年期の華邨は最前線にいたと言える。

華邨と石川県との縁は、工芸教育の父として名高い納富介次郎（1844-1918）を介して結ばれた。納富は明治20年に金沢工業学校の初代校長に着任し、近代石川の美術工芸の改良に大きな功績を残した人物である。明治22年、同校が石川県工業学校に改称すると、納富は図案意匠の教師として、華邨を呼び寄せた。遡れば納富はフィラデルフィア万国博覧会の審査官をしていた経歴があり、そこで華邨と知り合ったと想定される。以降、明治26年まで教鞭をとった。

今回紹介する「花鳥図押絵貼屏風」は六曲一双、紙本墨画淡彩。「押絵貼」とは屏風の一扇ごとに独立した図を貼る形式を言う。右隻第1扇・左隻第6扇に「癸巳」と年紀があり、明治26年（1893）の作とわかる。華邨の石川県工業学校での教師時代に制作されたことが確実な貴重な作品である。

画題を確認すると、右隻の第1扇は旭日と裏白を飾る鹿威しに鶯、第2扇は梅に鶯、第3扇は桜吹雪に鶏の親子、第4扇は杜若に鴨、第5扇は西瓜と百舌鳥、第6扇は公孫樹に鳩、次いで左隻は第1扇が蓮に鶯、第2扇が卯木と燕、第3扇は玉蜀黍と鶉、第4扇は菊に鶴、第5扇は月下の千鳥、第6扇は葦に雁。どの図も簡略な筆致ながら、花鳥を的確に描き分ける確かな技量を感じさせる。

右隻から左隻へと季節が移っていくようだが、夏から秋の部分でうまく並んでいない箇所もある。もとは各月を代表する花鳥を描く「十二ヵ月花鳥図」として作られ、表装替の折などに錯簡が生じた可能性も考えられよう。

本作は華邨が石川県工業学校で教えた和田重太郎（1873-1950）の子孫宅に今でも伝わる。山代出身の和田は在学中から、納富からの信頼厚く、明治27年に卒業すると納富が校長に任じられた富山県工芸学校と香川県工芸学校の創立に尽力。明治34年には納富の後を継いで香川県立工芸学校の校長心得に着任した。石川県工業学校での教育を各地に広めた人物として再評価が待たれる人物である。

本作の各扇には朱文円印（銭形）「華筵汚墨」が捺される。弟子の岡田梅邨（1864-?）によれば、この印は華邨が金沢へ来る前に清国公使館の壁画を手掛けた折、公使から授けられたもので、後にこれにちなんで梅邨に「華筵」という号を与えたという（同「鈴木華邨のこと」『藝術』第16巻第19号、1938年）。こうした華邨にとって記念となる印が捺されている点からも、和田への親愛がうかがえよう。

なお、古邨展の準備中に華邨の旧蔵品が見つかった。自筆日記や写生帖なども含まれており、現在解読を進めている段階である。改めて華邨の画業そのものや、近代石川の美術工芸の進展における華邨の功績を検証できればと考えている。



左隻 第6扇
落款印章



〈左隻〉



〈右隻〉

『石川れきはく』 誌面リニューアルについて

学芸員
コラム
Column

学芸員 野村 将之

昭和61年（1986）の開館以来、当館が35年近く発行を続けてきた広報誌『石川れきはく』。昨年度は年4回のうち3回も発行できないという異例の年でしたが、前号から発行を再開でき、担当としてほっとひと安心しています。そんな本誌ですが、本号から構成が変わったのにお気づきでしょうか。そこで今回は、内容の見直しについて、いろいろ思うことを書いていきます。

本誌の内容の見直しの声が上がったのは昨年の11月頃。理由はいくつかあるのですが、最大の理由は他の広報媒体との内容の重複にあります。近年の本誌は「イベントのお知らせ」の割合が高い傾向にあったのですが、他の紙媒体やホームページ・ツイッターとの重複も多く、「『石川れきはく』でしか伝えられない内容」とはいえなかったのも事実でした。そこで今回の見直しではそうした重複を減らし、学芸員の日頃の業務や研究活動の紹介を充実させることに重点が置かれました。新型コロナウイルスの影響で発行中止が続いた時期でしたので、内容を再検討するにはちょうどいいタイミングだったのかもしれません。

さて、いざ他館の広報誌を読んでみると、館によってさまざまなコーナーが企画されています。特別展・企画展関連だけでも、インタビュー形式での見どころ紹介や、座談会形式での紹介・振り返りなど、各館で個性を出した誌面構成が見られました。また、ボランティアへのインタビュー記事や新着資料の紹介など、博物館でそれぞれ力を入れている分野を記事にしたものもありました。最終的に新たな『石川れきはく』では特別展特集ページをそのままとし、「学芸員コラム」は学芸員の日頃の業務に関連する内容に一本化。一方で、新たに「研究ノート」と「資料紹介」のコーナーを設けました。これは執筆者によっては従来の「学芸員コラム」にも見られたもので、読み物として充実させるために独立させました。そしてページ数も6頁から8頁に増量させ、本号の発行となりました。

近年では広報媒体も多様化し、なかでも即時性や拡散性に優れるインターネットやSNSによる

発信が目立ちます。特に昨年度は展示やイベントの中止・延期などの案内が相次ぎ、そうした媒体のメリットが最大限に発揮された年度となりました。また、博物館での日々の仕事やちょっとしたお知らせなど、小出しにできる情報や新鮮さが求められる情報も、紙媒体で発信する意義はかなり小さくなっているように感じられます。

では、紙の媒体が消えていくかといわれると、私はそうは思いません。メリットが目立つインターネット関係の媒体ですが、一方では「情報が埋もれてしまいやすい」という難しさもあります。また、SNSでは一度に伝えられる情報量に限りもあり、物事を深くお伝えするには向いていません。こうした点を踏まえると紙媒体のメリットは、情報が発信される速度をあまり気にせず、自分のペースで接することができる点ではないでしょうか。また、書き手からみた良さとしては、ある程度自分の思いや考えが積み重なってきた時に、じっくりとまとめたり考え直したりできる点があります。今回新たなテーマに選ばれたものはいずれも、紙媒体で発信するのに向いている内容です。今後は媒体ごとに、それぞれの良さを活かせるように住み分けをよりはっきりさせていく必要があるように感じています。

このようにして完成したリニューアル後の『石川れきはく』。今後も本誌ならではの情報を発信できたらと思います。



過去の『石川れきはく』たち。
今回は表紙のイメージはそのままに、中身を充実させました。



津軽深浦 越後屋庄兵衛と 日本海廻船業

学芸主幹兼資料課長 濱岡 伸也

はじめに

古文書整理の中で越後屋庄兵衛に出会ったのは、昭和57年に寄贈された「大鋸コレクション」に含まれていた「宮林家文書」（平成5年に目録「大鋸コレクション古文書目録（1）宮林家文書目録」が刊行されている）においてである。宮林家は、砺波郡の豪農であり、農村地帯で産出される稲藁から漁網を製作し富を得ていたという。18世紀に入って、居を射水郡放生津へ移し、肝煎役や米仲買を務めていた。そのため、「武士の米」を調べていく中で使っていた古文書であった。その過程で、目録に「神速丸」「仕切書目録」などの項目見出しが並んでいたものの深く関心を持たなかった。ところが日本遺産認定の前後から、「北前船」の枠組みの見直しや、遺産関連の調査などが行われる中、宮林家でも興味深い事実が浮かび上がってきた。そのなかで、大きな位置を占めているのが越後屋庄兵衛だった。

一、宮林家の廻船事業

宮林家、屋号を「綿屋」といい、廻船業に参画する頃の当主は彦九郎であった。綿屋彦九郎は、天保12年（1841）、高岡町井林屋伊右衛門から750石積の弁才船を購入した。これが廻船業との出会いであった。さらに、480石積の弁才船も買い入れ廻船業にも力を注ぐこととなった。

万延元年（1860）5月26日、越中伏木を出帆した神速丸は、29日に能登小木へ。そこから放生津を経て、佐渡小木へ、さらに北上して6月5日に津軽深浦へ到着した。6月12日には金ヶ沢、7月2日には松前に到着した。7月25日には、一旦出羽飛鳥へ南下して江差や松前の相場などを聞き合わせたのち、放生津へ戻っている。さらに10月には、能登二見から能登七尾を経て、26日に放生津へ戻った。文化3年（1807）も神速丸は日本海を下り、7月20日に箱館の東、吉岡へ入った。そこから箱館へ回ったが産物の買い入れがうまくいかず、8月1日に松前へ移動した。松前で、二種の唐太粕を買い入れることができた。「ト印」は21貫300匁、「ホ印」は21貫600匁となり、半分は自分で買い入れた。上方輸送委託分については「ト印」37匁増、「ホ印」36匁増で買い付けた。残りの粕は同じ値段で宿元が買い入れた。これは、神速丸の船頭彦次郎が船主の綿屋彦九郎へ送った書状である。これは、運賃積みと、買い積みとを示していると思われるが詳細が不明である。上方輸送を委託しているのは、宿元と同じなのか？書状では続けて、箱館から松前へ船を呼んでいるが天候が悪く遅れている（これが、神速丸と同時期に入手した恵吉丸480石積と考えられる）。注文品については恵吉丸が輸送し、神速丸は上方へ日本海を上る航海に就くようである。後日、神速丸彦次郎から綿屋彦九郎へ出された書状が残っている。8月20日頃に積み分け・積み込みが終わり、日本海を上ってきた船は、10月27日に兵庫へ入津、リイシリ（利尻）粕・ル、モツへ（留萌）粕・唐太ソヲヤ（宗谷）粕などを売って316両程の利益を得た。大坂では相場が高くて取引が成立しなかった。綿屋では、この時期複数の弁才船（少なくとも5艘）を有して廻船事業を行っていたとみられ、各地を飛び回って調整を行っていたのが神速丸と考えられる。一方、恵吉丸（船頭甚吉）は津軽深浦を係留地として、綿屋の北方交易の基盤を担っていたと考えられる。

二、越後屋庄兵衛と宮林家恵吉丸甚吉

19世紀に入ると蝦夷地や北日本を中心に、各地の沿岸部にまで外国船の出現が多くなり、漁業でのトラブルも増えてきた。幕府も対策に乗り出し、箱館を直轄するとともに蝦夷地の西海岸に砲台や監視の役所を設けることとし、津軽藩や秋田藩などに命じた。その結果、蝦夷地交易の拠点となる「場所」の管理をしてきた松前藩の領域が狭められ、箱館奉行所が東部や南部を統括し、小樽以北では津軽藩の管理場所も広がった。

明治3年4月、津軽深浦を拠点としていた綿屋の恵吉丸・船頭甚吉は、深浦の越後屋庄兵衛を問屋、中田屋発蔵を仲立ちとして、弘前の津軽商社（野村常三郎・武田熊吉・今村九左衛門）と輸送の契約を結んだ。野村以下3名は津軽藩の担当者とみられ、津軽商社の蝦夷地担当者は、利尻出張所が大橋弥兵衛、小樽内出張所が金澤英助であった。恵吉丸甚吉が受けた契約内容は、津軽商社が管理する利尻郡増毛場所から「荷物300石」を津軽や大坂へ輸送するもので、敷金として900両を前払いした。この契約によって、越中の廻船問屋綿屋は、津軽商社の仕事を受け、同社が北海道で所有している増毛「場所」から、鯶𩺰粕や数の子粕を積み入れ、小樽内を経由して、津軽や大坂へ輸送した。一旦、恵吉丸甚吉が買い取りのような形で代金を入れ（着手金、保証金のようなもの）、深浦に入津すると越後屋庄兵衛の仲介で津軽商社が買い取る形で取引が成立していたようである。津軽商社からは、商品代のほか小樽の手宮問屋会所（明治4年には手宮海官所となる）に先行して支払われた各種税金や運賃も支払われた。運賃積みの委託契約とみられる。明治4年の場合にも、手宮海官所の出津許可証には、増毛場所から積出した𩺰粕などを大坂へ輸送することが記されている。このように、越中の廻船問屋である綿屋は、津軽の問屋を介して、津軽のみならず北海道との取引に関わり、北国から運んだ米やわら製品などの販売と、木材や海産物の買入や委託輸送などを行っていたのである。

三、明治期の廻船経営

かつて、「こうした長年の取引によるノウハウの蓄積と、現地に入り込んで得た信頼が、同時期から盛んとなる北海道移民の入植と、それぞれの地を繋ぎながら輸送業や漁業に転化して成功を収めた明治期の廻船問屋へと受け継がれた感がある」と記した。しかし、廻船問屋は、開国、明治維新を経て、貿易を主とする流通物資の変化や木造帆船から鋼鉄蒸気船への設備投資の激流の中、対応しきれずに業態を変更するものも多かったのである。綿屋彦九郎は、明治10年頃から所有船を売却し、大型定置網経営と運輸会社の設立へと経営転換を行ったことが古文書からうかがえる。綿屋と密接な関係にあった津軽深浦の越後屋庄兵衛もまた、業態変更を行ったようである。

明治10年ごろ、彼の名前が「能登福浦湊佐渡屋客船帳」〔当館所蔵〕から見つかった。①明治6年5月28日に越後屋庄兵衛の持船長運丸（船頭福松）、②明治7年5月30日に幸運丸（船頭新吉）、③明治9年6月3日に明運丸（船頭太三郎）の入船が記録されている。さらに、明治10年4月28日には、主人の越後屋庄兵衛が長運丸に乗って佐渡屋を訪問したことが記されている。津軽商社のもとで蝦夷地交易を差配していた経営から、持ち船を日本海航路へ帆走させ廻船問屋の性格を打ち出すようになったとみられる。綿屋と越後屋、あたかも入れ替わったような転身ぶりといえるが、江戸時代に活躍した廻船問屋たちは、明治時代が形を整えていく中で大きな決断を迫られていたことの一例と考えられる。

おわりに

江戸時代に活躍していた廻船問屋たちの終焉はなかなか捉えられない。越後屋庄兵衛のように、江戸から明治にかけてある程度の活動がわかり、業態の変化まで推測できる事例は貴重である。越中の綿屋彦九郎もまた同様である。越後屋は、明治10年頃に岸本姓を名乗っていたようである。現地調査を行ったうえで、より深い考察を加えていきたい。

催し物
案内
Information

展示解説や各種講座などの情報をお知らせします。
※各種催し物の詳細については、当館ホームページにてお知らせします

5月

- 8日(土) **石川の歴史遺産セミナー**
第1回「怡情動植－中国花鳥画の伝統－」
講師：宮崎 法子氏 (実践女子大学 教授)
- 14日(金) **いしかわ歴史講座**
「中世いしかわの信仰世界」 講師：岡崎 道子
- 22日(土) **れきはくゼミナール**
「古代の豪族居館をさぐる」 講師：三浦 俊明
- 23日(日) **石川の歴史遺産セミナー**
第2回「近世日本における花鳥表現の伝統と革新」
講師：中村 真菜美 (当館 学芸員)
- 26日(水) **古文書講座 (前期第1回)**
「米商人たちがみた武家社会」
講師：濱岡 伸也
- 28日(金) **いしかわ歴史講座**
「縄文ムラ・水辺のなりわい」 講師：野村 将之

- 30日(日) **石川の歴史遺産セミナー**
第3回「煌めく花鳥版画の世界－近世から近代へ－」
講師：月本 寿彦氏 (茅ヶ崎市美術館 学芸員)

6月 休館日：6/28(月)・6/29(火)

- 12日(土) **れきはくゼミナール**
「再興九谷－その歴史と目的－」 講師：野村 将之
- 13日(日) **石川の歴史遺産セミナー**
第4回「近代日本の美術工芸品にみる花鳥図案」
講師：野呂田 純一氏 (〔公財〕かながわ国際交流財団 副主幹)
- 18日(金) **いしかわ歴史講座**
「古代のお触書『加賀郡勝示札』」 講師：三浦 俊明
- 23日(水) **古文書講座 (前期第2回)**
「米商人たちがみた武家社会」
講師：濱岡 伸也
- 26日(土) **れきはくゼミナール**
「靈場 明泉寺の歴史と文化財」 講師：岡崎 道子

石川の歴史遺産セミナー
「花鳥画の歴史
－中国から日本、そして欧米へ－」
聴講無料
要申込

いしかわ歴史講座
毎月1～2回、金曜日に実施。当館学芸員による「いしかわの歴史・文化」に沿った講座です。
要観覧料
要申込
全12回

れきはくゼミナール
毎月1～2回、土曜日に実施。当館の学芸員が独自のテーマを設定し講義します。
受講無料
要申込
全12回

古文書講座
当館の学芸員が古文書の読み方や内容を解説します。
受講無料
要申込
随時開催

次回
展覧会
のお知らせ

石川県立歴史博物館 令和3年度 夏季特別展 「大加州刀展」

(写真) 刀 銘賀州住兼若造 (初代兼若) 江戸時代初期 石川県立歴史博物館蔵

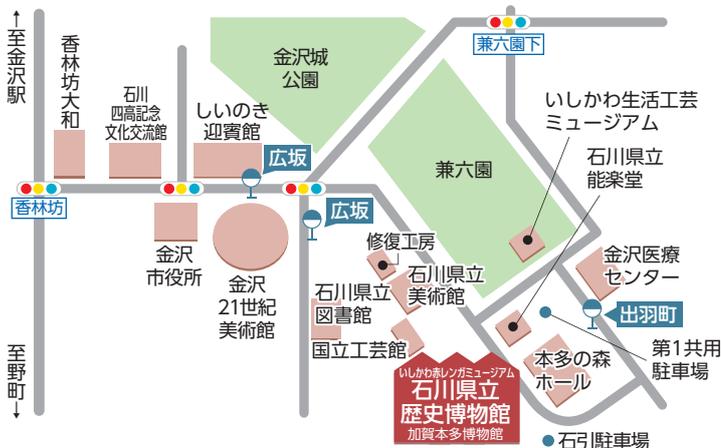
2021
7/22(木祝)～9/12(日)

開館時間 9：00～17：00
(展示室への入室は16:30まで)

会場 石川県立歴史博物館
特別展示室・企画展示室

加州刀工の魁として知られるのが南北朝時代に活躍した「真景」や越前から移住してきた「藤嶋友重」です。また、室町時代中頃から江戸時代を通じ連綿と続いた「清光」歴代も見落とせません。加えて、江戸時代初期には美濃から「兼若」が当地に移り、変化の多い相州伝や華麗な備前伝を取り入れ「加賀正宗」の名声を得て一世を風靡し人気を博し、その作風は他の刀工たちにも影響を与えました。

本展は、古刀期から新々刀期までの加州刀を系譜別、年代別に80余点で俯瞰し、その魅力の神髄を探る目的で開催するもので、併せて拵の逸品も公開します。



いしかわ赤レンガミュージアム
石川県立歴史博物館
ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY

〒920-0963 石川県金沢市出羽町3-1
TEL: 076-262-3236 FAX: 076-262-1836
E-mail: rekihaku@pref.ishikawa.lg.jp
http://ishikawa-rekihaku.jp/



石川県立歴史博物館 広告

「石川 れきはく」

に広告を掲載して PR サービス・集客 しませんか？

れきはくメイト(友の会)会員、学校、博物館、図書館、その他公共施設へ 配布!!

ターゲットを狙った
知名度向上

石川県立歴史博物館の
信頼度の高い
広報媒体

お問い合わせ 株式会社ホープ ☎092-716-1401
福岡県福岡市中央区薬院1-14-5 MG薬院ビル7F
東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q-Board上場 財源確保 検索